# 広島弁

清川　文香

娘が広島に転勤してからこの秋で3年になる。

「部長が、『みんな早う仕事上がって球場に行きんさい』言うちゃってねー」

たまに帰ると、わざとらしい広島弁を使っている。すっかり職場に溶け込み、仲のいい友人もできて、みんなでカープの応援に行くのも日常になっているようだ。

最近、ドラマなどで広島弁をよく耳にする。私はそれを聞くたびに、亡くなったおばのかわいらしい広島弁を思い出す。

「よう来たねぇ。えっと(たくさん)食べんちゃいや」

母の実家は広島県北部の田舎町にあった。夏休みには母に連れられ、小さい弟と3人で電車を乗り継ぎ、ほとんど1日がかりで帰省したものだった。

高速道路が発達した今では車で2時間ほどだが、当時は新幹線もない時代。山あいにはまだディーゼル機関車が走っていた。隣の県とはいえ、かなりの遠方という感覚だった。

母には兄が3人、姉が一人、そして弟と妹がいた。兄も姉も弟もみんな広島市内に出てしまい、実家は末の妹が継いでいた。明るくて優しいおばは、私たちをとてもかわいがってくれた。

母の実家は小さな商店街の一角にあり、通り沿いに小さな店が並んでいた。農村で育った私にとってはそこを歩くだけでも物珍しく、楽しかった。広島に行くのは年間最大のワクワクするイベントだった。

私たちが帰省すると、おじがよく会いに帰ってきてくれた。

母の弟は、きょうだいで一番ひょうきんで面白いおじさんだったが、ただ一つ嫌なのは、私を「おきゃあま」と呼ぶことだった。私が岡山弁を使うと、すぐ上げ足をとって「こられえ、たべられえ」などとぎこちない岡山弁でからかう。小学校高学年くらいになると、それがとても恥ずかしい。

母は広島に帰ったとたんに広島弁になる。周りはみんな広島弁。そのころの私の心には、疎外感という言葉がぴったりだった。広島に行くたびに私は語尾があいまいになり、無口になった。懐かしさとともに広島弁の思い出には少しの切なさを伴う。

母が岡山にお嫁に来たとき、近所のおばさんたちに、「あそこの嫁はねぇねぇ言葉を話す」と、うわさされたそうだ。今のように情報もなく、方言について知識も耳なじみもなかった50年以上も前のことだ。

母は父と仲良く我が家の近くに住む。帰省した娘が「おばあちゃん、もみじまんじゅう食べんちゃい」とお土産を持って行く。笑いながら母も広島弁で答える。

「体に気を付けて、がんばりんちゃい」

作者　清川文香
題名　広島弁
原典　山陽新聞夕刊エッセー
原典の掲載日　2018.12